

心理臨床における「居場所」概念

中藤 信哉

1.はじめに

教育現場や心理臨床領域において、「居場所」という言葉が用いられる場面は少なくない。不登校やひきこもりのクライアントに対する援助として「居場所づくり」という表現がなされたり、面接場面においても、クライアントから「居場所がない」という言葉が発せられたりする。クライアントからは直接そのような言葉が発せられなくとも、セラピストが「このクライアントには居場所がない」と見立て、クライアントを理解する場合もあろう。このような状況を考えると、元来、日常語であった「居場所」という言葉は、一つの概念として用いられるようになっていと考えられる。例えば北山（2003）は“心理臨床や精神科臨床では「自分が空虚」「本当の自分が見つからない」「自分の居場所がない」「中身がない」という訴えとともに、「自分がない」あるいは「自分の居場所がない」という表現で病理がまとめられるような症例に数多く出会う。このことは、分裂病から神経症、さらに「スキゾイド」や境界パーソナリティまで様々な病態で問題になる”と述べている。

しかしながら、「居場所」の概念が広く用いられ、特に1990年代から盛んに研究されている一方で、その定義は確定されているわけではなく、用いられ方は多岐に渡る。そして、その点と関連して臨床の場において、「居場所をつくる」、「居場所がない」といった表現がなされるときにも、日常語としてのニュアンスから、大まかな意味は伝わり得るが、具体的にどのようなことを指しているのかは曖昧な場合も多い。このように、「居場所」という概念には、その使用に際して問題がないとはいいがたい側面がある。

上記のような「居場所」概念に付随する問題がいかなる事情に由来し、そしてまた、「居場所」概念が心理臨床の実践において用いられるときに、考慮すべき視点としてどのようなものがあるのかを明らかにすることには、意義があると考えられる。本研究においては、「居場所」概念が心理的な次元の意味を具えたものとして成立してきた経緯や、臨床場面での用いられ方を検討することを通して「居場所」概念の性質について検討し、心理臨床実践において「居場所」概念が用いられるとき、治療関係において生じている力動について考察することを目的とする。

2.「居場所」概念の成り立ち

本節では、「居場所」という概念が現在のような形で用いられるようになった歴史について検討する。後述するように、「居場所」概念は教育現場や心理臨床領域において、その始まりから既にあった概念ではない。頻繁に使用されるようになってきたのは1992年の文部省（現文部

科学省)の報告書以降のことであり(石本, 2009)、現代的・社会的な背景のもと形成されてきた側面が強いと考えられる。

山田(2011)が「ひきこもり」概念について“ひとつの概念は、その時代、その文化にとって、何がしかの必要性を持って作られたと考えるべきだろう”と述べているように、「居場所」概念についても同様のことが当てはまると考えられる。すなわち、「居場所」という概念が歴史上のある時期に生じてきたのだとすれば、「居場所」概念が用いられるようになった文脈には、そのときの時代、文化、社会的文脈における何らかの必然性が反映されていると考えられる。本節では、「居場所」概念が現在のような形で用いられるようになった経緯について検討し、いかなる時代的・社会的文脈の中で誕生したのかについて考察する。

「居場所」という言葉は、元来は「人の居るところ」「居どころ」といった意味だったが、現在においては、「安心して身を落ち着けるところ」といった心理的な意味合いが付与された言葉となっている¹(中島, 2007; 石本, 2009)。「居場所」という言葉に心理的な意味合いが含まれるようになったのは、住田(2003)が“子どもの場合、不登校の問題がある”と述べているように、児童・生徒の不登校問題との関連が指摘されている²。

不登校については、Broadwin(1932)による研究が最初であり、1940年代にアメリカにおいて、Johnsonら(1941)が「学校恐怖症」として名付けたことで注目を浴びるようになった³(山中, 2001; 保坂, 2001)。その後、日本においても1950年代より研究がなされるようになった。1950年代は、不登校は母子分離不安による症状、すなわち「学校恐怖症」として捉えられる傾向があった。しかし、1970年代になり、個人病理のみならず、学校側の要因も無視することはできないという視点から、「登校拒否」として捉えられることになり、その後、1980年代に入り、高度成長経済など現代の時代性や社会背景なども踏まえた上で、一種の社会現象として不登校を捉える必要性が認識され、呼称についても「登校拒否」から「不登校」が一般的になった(伊藤, 2009)。

不登校問題についての上述した流れの中で、1980年代より、不登校の子どもの親たちが、学校に行けず、家にも居心地良く居ることのできない子どもたちが通う場所として、フリースクールを設立するようになった。住田(2003)は、これらのフリースクールが「居場所」の原型であると述べている。

1992年には、文部省(現文部科学省)が、行政的な立場から“登校拒否はどの子にも起こりうるものである”という見解を示し、“学校が児童生徒にとって「心の居場所」”となる必要があるとの方針を提示している。この文部省(1992)による報告以降、不登校児童・生徒の心理的居場所を作るという目的で教育支援センター(適応指導教室)が各地に積極的に作られることとなった(伊藤, 2009)。また学術研究においても1990年代に入り、教育分野や、心

¹ 中島ら(2007)によれば、2000年より以前は、国語辞典において「居場所」は“人の居る所”“居どころ”といった意味しか持たなかったが、2001年以降、“人が世間、社会の中で落ちつくべき場所”“安心していられる場所”といった意味が加わるようになった。

² 同様の指摘は、安齋(2003)や中島ら(2007)、石本(2009)によってもなされている。中島ら(2007)は、新聞記事における「居場所」の用語の増加に着目し、不登校問題の記事の増加と「居場所」という用語の使用の増加に、相関があることを指摘している。

³ Treynor(1929)による研究が最初であるという捉え方(北村, 1991)もある。

理学および心理臨床領域において、「居場所」についての研究が行われるようになる（杉本・庄司, 2007；中島, 2007；石本, 2009）。

このように、「居場所」概念は不登校問題をめぐる歴史的・社会的背景のもと登場したと言える。フリースクールの先駆的存在とされる東京シュール（住田, 2003）の設立に携わった奥地（1991）は、次のように述べている。

すべての子が学校に行くことになっており、行かないことが異常視される社会では、何かの事情で不登校状態になると、生活の多様な側面——人間関係、学習権をはじめさまざまな権利が奪われてしまう結果になり、家庭に居てできることをするしかなくなってしまうのです。・・・たいていの家庭が「学校に通っている子はまともだが、学校に行かない子はダメな子、将来がない。早く登校してほしい」という態度で接します。ですから、学校に行かなくなると、生きていく基本空間である家庭さえ本人の居場所ではなくなると、それはつらい精神状態に追い込まれます。

学校が「当然行くべきところ」として社会で認識されている中で、そこに行けなくなると、子どもは学校以外の空間や、家においてさえも安心して居ることができなくなる。それは、学校以外の空間や家において、他者が「学校は当然行くべきところ」という態度で子どもに接し、子どもが学校に行けない背景について理解を示す他者が不在であるからに他ならない。このようにして、子どもにとってはいかなる空間も、「学校に行かない」という自分の行動を肯定しない他者の目に晒され、居心地の悪いものとなる。学校にも居ることができず家庭でも居心地が悪いという不登校の子どもへの苦痛に対する援助として、安心して居心地良く居られる場が提供されることとなり、そうした場が「居場所」として捉えられ、その重要性が認識されていったと考えられる。

このような「居場所」の概念は、必然的に、「学校は当然行くべきところ」という社会的に共有されている価値観とは異なる価値基準を含んでいる必要がある。このことを住田（2003）は“学校的文脈を離れたところにあつて、学校価値に否定的あるいは対立的な意味合いを含んでいる”と表現している。「学校は当然行くべきところ」という価値観を自明視しない他者によって構成され、提供される場において、子どもは居場所のない心理的苦痛から解放され、安心を得られるようになる⁴。このようにして、元来「人が居るところ」といった、物理的・記述的な概念だった「居場所」という言葉に、現在のような「安心して落ち着ける場所」といった心理的な意味が付与され、定着していったと考えられる⁵。

⁴ もっとも、不登校児童・生徒数の増加と、その事実の社会への浸透により、「学校は行くべきところ」といった価値観は、1990年代に比べ、自明ではなくなってきた可能性がある。伊藤（2009）は“価値観が多様化し、“学校に行かない生き方”が広く認められ、登校を強制しようという意識が薄らぎつつある今、学校に行くという規範そのものが問い直され変容してきている”と述べている。そうした価値観の変化に伴い、「居場所」の意味合いや位置づけも変わっていく可能性があると思われる。

⁵ もちろん、「居場所」という言葉が心理的意味を付与されて使われたのは不登校の文脈が最初ではないと考えられるが、現在のような形で用いられ方が定着するようになったのは、やはり不登校問題との関連が大きいと思われる。

このとき、学校には行けず、家庭にも居づらいという子どもの心理的苦痛や葛藤に対して、その苦痛が軽減され、「安心」が提供されることが目指されたのであるが、その具体的方法として、フリースクールを始めとする特定の物理的な空間が設けられたという事実は注目に値する。すなわち、心理的な苦痛や葛藤、課題に対して、直接的な心理的な次元での介入ではなく、物理的な場の提供という方法が採られている。こうして、そこに居ると安心できる「居場所」とは、同時にある一定の物理的空間でもあるという認識が成立することになる。これは「人の居るところ」という「居場所」の元来の記述的意味からすれば必然的でもあるが、重要なのは、心理的な次元への、物理的要素の影響や重要性が認識されるようになったことであろう。

「居場所」とは何よりもまずそこに居る個人にとって、主観的に「居場所」と感じられなければならないのであるが、そうした居場所の「主観的条件」とともに、いかなる外的な場が個人の居場所となるのかという居場所の「客観的条件」もまた、「居場所」を考える際の観点となった。このことは、「居場所」について研究する際の定義や対象の幅広さを生むこととなる⁶。これまで「居場所」についてなされてきた研究においても、「居場所」があるという感覚を指す「居場所感」あるいは「居場所感覚」といった、純粋に心理的・主観的次元に焦点を当てた研究もあれば、どのような建築や空間が人にとっての居心地の良い「居場所」となるか、またどういった他者と一緒にいる空間が「居場所」となるかといった物理的・客観的次元に重点が置かれている研究もある。心理的な側面と物理的な側面が混在する「居場所」について研究するとき、それぞれの側面にどれだけの重点を置くかという点と、両者の関係をどう考えるかという点について考慮せねばならないのである。

こうした背景の中、居場所の分類が試みられることになる。例えば住田（2003）は、居場所の条件として、当の個人にとってそこが居場所だと認識される“主観的条件”と、居場所の“客観的条件”を分け、特に“客観的条件”には“関係性”と“空間性”の2つの要素があるとしている。そして、「居場所」の関係性と空間性がそれぞれ個人的か社会的かによって、「居場所」は4つに分類されうること指摘している。杉本・庄司（2006a；2007）は、実証的研究の結果から、「居場所」における他者との関係性に関して、“自分ひとりの居場所”“家族のいる居場所”“友達のいる居場所”の3つの分類しようとしている。このように、「居場所」の分類に際して、空間性や他者との関係性といった客観的次元が考慮されている⁷。

このように、「居場所」概念は不登校問題との関連において、フリースクールといった具体的な物理的環境による援助がなされてきた流れの中で、現在のような「安心して落ち着ける場所」でもあり、「人の居る」物理的な場所といった形で用いられるようになり、心理的な次元と物理的・客観的な次元の両側面が存在していることを見た。

⁶ 居場所を定義する際、演繹的・理論的に定義しようとする場合と、帰納的・実証的に定義しようとする場合がある。前者の場合は、その定義が日常生活や学術空間で用いられている「居場所」概念を包括的に捉えられているかという問題が生じる。後者の場合は、例えばその方法として、質問紙の自由記述などを用いて、調査協力者が実際に居場所をどのような意味で用いているかを収集することになるが、「居場所」が日常語であり、多義的である以上、回答も幅広いものとなり、定義を確定することが困難となる。また、質問段階で、調査者がある程度“居場所”を定義しなければならないという問題も含まれる。

⁷ この他にも、例えば藤竹（2000）の“人間的居場所”、“社会的居場所”、“匿名的居場所”といった分類や、安齋（2003）の“逃げ場としての「居場所」”“自己発揮の場としての「居場所」”といった、「居場所」の心理的次元における性質の違いによる分類もある。

しかしながら、臨床的な観点で考えるならば、「居場所」によって子どもの苦痛がどのように解消されたのか、という点について考える必要がある。このとき、学校にも家にも居づらい不登校の子どもに、フリースクールを初めとする物理的・客観的な場が提供されたのであるが、そうした言わば外的な次元でのみ子どもの苦痛の解決がなされているわけではないことには注意せねばならない。奥地との対談において、河合（1999）は“居場所があるというのはいいことなんです。居場所がちゃんとあると、そこにいて自分で悩む”と述べている。居場所の重要性は、安心して居られる場所があるということだけでなく、そこで“悩む”といったような心理的な次元での作業がなされるという点にあると考えられる。したがって、「居場所」について臨床的な立場から考える際、「どのような場所や空間が居場所となるのか」といったことのみならず、「居場所において、個人の心の作業として何がなされるのか」に焦点を当てることが重要であると考えられる。

以下の節では、「居場所」という概念をめぐる、心理臨床実践でどのような力動がはたらき、いかなる心の作業がなされるのかという点について、主に心理臨床領域の文献に焦点を当て検討していく。

3.心理臨床における「居場所」概念

本節においては、特に心理臨床の領域において「居場所」概念がどのように捉えられ、用いられてきたかについて検討する。その際、「居場所」という視点が登場する事例研究について概観する。

事例中に「居場所」という視点が登場するものとして、田村（1996）や、岡田（1998）、西村（2000）、矢幡（2003）、鈴木（2005）などがある。これらの研究においては、クライアントが「居場所がない」と訴えているもの（岡田, 1998）、クライアントの苦痛や心理的課題に関して居場所という視点から考察したもの（田村, 1996；西村, 2000）、クライアントの面接過程について、居場所の観点から考察したもの（矢幡, 2003；鈴木, 2005）などに区分することが可能であると考えられる。岡田（1998）においては、「居場所がない」と訴えるクライアントとの精神療法過程について考察されているが、事例理解の力点は「居場所」に置かれているわけではない。田村（1996）においては、クライアントの所属する社会的組織に「居場所」という言葉が用いられており、その「居場所」は理想的な父母の代替物であると考察されている。西村（2000）においては、長期入院している重症心身障害患者が、家庭に居づらさを抱え、病院も内面や気持ちを表現する場とはなっていないことを「心の居場所」がない状態として捉えている。矢幡（2003）や鈴木（2005）は、クライアントが安心していられる場を求める過程を、「居場所」を模索する過程として考察している。これらの研究において用いられている「居場所」の概念には、「安心していられるところ」「気持ちを表現できるところ」といった、ある程度の共通性があることが窺われるが、「居場所」の定義はなされておらず、意味するところにも幅がある。また必ずしも「居場所」概念が事例理解の中核に据えられているわけではない。

一方、「居場所」を事例理解の鍵概念として用いている研究として、廣井（2000）や中原（2002）、徳田（2004）がある。廣井（2000）は、「居場所」があることを“自分自身でいられることが認められていると感じること”と定義し、非行少年の事例について、クライアントが様々な場

に同一化しようとするのは居場所がない不安ゆえの過剰適応であると捉えている。セラピストがクライアントの居場所のない不安を理解し、クライアントのあるがままを受容しようとすることで、クライアントの意識から締め出され、自分であるとは受けとめられていなかった非自己の部分が意識領域に入ってきて、悩んだり葛藤したりすることが可能になると述べている。中原（2002）は、「居場所感」を“自分がそこにいてもいい場であり、自分らしくいられる場であり、自分がありのままにそこにいてもいいと認知し得る感覚”と定義し、重症局所進行乳癌患者の受診遅延の理由について「居場所感」の観点から考察している。中原（2002）は、居場所の機能を、「居場所感を充足し、依存や否定的感情などを安心して表明できるもの」としている。徳田（2004）はスクールカウンセラーとして携わった事例について、藤竹（2000）の“人間的居場所”“社会的居場所”の概念を援用しつつ、“居場所さがし”という観点から考察している⁸。徳田（2004）によれば、「居場所がない」、「居場所がほしい」と訴える児童や生徒は稀ではなく、その背景には“自己所属感・帰属感の希薄さ”“対人信頼感の希薄さ”“家族関係の希薄さ”“自己肯定感の希薄さ”といった課題があるとし、不登校のクライアントは“人間的居場所”さがしから、“社会的居場所”さがしへと進んでいくケースが多いと述べている。

さらに、クライアントを「居場所」を失った状態として捉え、臨床実践を「居場所」の提供として捉えようとしている研究もある。村瀬ら（2000）は「居場所」を“心の拠り所となる物理的空間や対人関係、もしくはありのままの自分で安心していられる時間を包含するメタファー”として定義し、通所型中間施設を「居場所」として捉え、「居場所」を見失ったクライアントに「居場所」を提供しクライアントの“育ち直し”を支える治療過程について考察している。

廣井（2000）や村瀬ら（2000）、中原（2002）の居場所、あるいは居場所感についての定義で共通しているのは、居場所を「ありのままの自分」で居られる場であるとして捉えている点である⁹。

しかし、「ありのままの自分」がどのようなものを指すのかは明確ではなく、こうした「ありのままの自分」をめぐる、「居場所」において、クライアントが一体いかなる心の作業をしているのかについても十分明らかにされているとは言い難い。次節においては、「ありのままの自分」と「居場所」という概念に焦点をあてることで、クライアントから、またクライアントとセラピストの間で、「居場所」がテーマとして浮かび上がってくるとき、いかなる力動が働き、心の作業がなされるのかについて考察する。

4. 「居場所」をめぐる力動

前節では、「居場所」を鍵概念とする臨床実践にかかわる研究において、「居場所」が「ありのままの自分」で居られる場所として定義されていることをみた。

こうした「居場所」と「ありのままの自分」といったことに関して、北山（1993）は、「居

⁸ 藤竹（2000）によれば、“人間的居場所”とは自分であることを取り戻すことができるような場を指し、“社会的居場所”とは、自分が他人によって必要とされ、自分の資質や能力を社会的に発揮できるような場を指す。

⁹ この他、事例研究ではないが、臨床実践を「居場所」という観点から捉えようとしているものとして、妙木（2003；2010）や本間（2006）が挙げられる。これらにおいても、「居場所」は“ありのままの自分を抱えてくれる”場所、“存在をまるごと認められる”場所として捉えられている。

場所」を、Winnicott, D.W.の holding や being および true self の概念と結びつけて考察し、「本当の自分」が居ることを抱えられる環境を「居場所」であるとしている。そして“「本当の自分」とは「あるがままの自分」「素顔の自分」を意味しやすく、その発生論的な起源を語るとき、うまれたばかりの赤ん坊のときの「裸の自分」と同一視されやすい。それで「のびのびした自分」「元気な自分」が想起されやすいが、「死んだ自分」「傷ついた自分」「バラバラ」が「本当の自分」であることもある”（北山, 1993）と述べている。このとき、「ありのままの自分」あるいは「本当の自分」の、いわば否定的・病的な側面について指摘していることは注目に値する。「ありのまま」というものが仮に想定されるのだとすれば、それは「のびのび」「元気」といった肯定的なもののばかりではなく、むしろこうした否定的な意味合いをもつ側面こそ重要となるのではないだろうか。激しい攻撃性を備えた自分や抑うつ的な自分といった、クライアント自身も持て余すような自己の困難な部分が受容されることが、「ありのままの自分」といったものが実感される上で重要ではないかと考えられる。

こうした自己の困難な部分が表出され、受容されるとき、クライアントと治療者あるいは治療的な環境との間で、「依存」が達成されていなければならないと考えられる。クライアントが、治療者や治療的環境に依存できて初めて、クライアントの困難な部分が、クライアントにも実感される形で治療の場にもたらされるのではないだろうか。このことと関連して中原（2002）は、居場所の機能を“依存や否定的感情などを安心して表明できるもの”としている。クライアントが、面接関係をはじめとする治療的環境に依存することができて、初めてクライアントの困難な部分を含む「ありのまま」で居られるようになるのである。

しかし、治療の場に対するクライアントの依存は簡単に達成されるわけではない。「ありのままの自分」とは、クライアント自身も受け入れがたい自己の部分を含むものであり、そこには「否定」をめぐる心の動きが伴う。つまり、クライアントはこれまで、自分自身の困難な部分が、環境に十分に受け入れられず、そうした「ありのままの自分」は環境によって、あるいはクライアント自身によって否定されてきたという経緯がある。治療者の態度として、クライアントを否定せず、受容しようとするのは重要であるが、そこにはクライアントの否定されることをめぐる恐れや、依存をめぐるアンビバレンスが動いていることを意識している必要がある。松木（2005）は“治療関係における依存は、当然クライアントがその依存をめぐる葛藤する状況をもたらす”と述べている。セラピストがクライアントを否定せず受容していれば、自ずとクライアントが「ありのままの自分」で居られるようになるとは限らない。場合によっては、クライアントの抱く恐れやアンビバレンスに触れる必要もあると考えられる。面接において「居場所」がテーマとして浮かび上がってくる際、治療的關係においてこうした力動がはたらいっている可能性がある。

このような動きを経て、面接関係や治療の場がクライアントの「居場所」となるのだとすれば、「居場所」は達成されればそれで良いというものではなく、「居場所」ができた後、何かなされるかが重要となろう。クライアントの困難な部分が治療空間において抱えられるようになり、初めてクライアントはそうした部分を扱う作業ができる段階に入るのである。廣井（2000）は、“居場所ができ始めたときには今まで意識領野外に置いていたものを抱えるようになり、その結果不安や葛藤が生まれる…（略）…居場所ができ始めたときから本人の悩みが始まった

とすれば、会い続けることこそが大切になる”と述べている。

5.個人の歴史としての居場所のなさ

前節では、面接を初めとする治療的な関係において、「居場所」がテーマとして浮かび上がってくる際の力動について考察した。本節では、「居場所」がテーマとなるクライアントのありようについて考察し、そこから再度、治療的な関係について言及したい。その際、特に「居場所のなさ」が問題となるようなクライアントのありようについて考察する。

不登校について、文部省（1992）が“どの子にも起こりうる”と言及しているのと同様に、「居場所」を失う事態、「居場所のなさ」もまた、誰しにも生じうるものだと考えられる。進学や就職、家族環境の変化など、様々な外的環境の変化を契機として、人は「居場所がない」と感じるような事態に陥りうる。

しかし一方で、こうした外的状況の変化に伴う、いわば一時的な不適応状態とは異なる「居場所のなさ」も存在すると考えられる。木村（1994）は統合失調症者について、“彼らにとっては「イル」と「アル」の区別は元来それほど明確でない。だから彼らにとって、われわれの相互主体的な生活世界に「居場所」を見出すことは困難となり、生活世界は彼らにとって居心地の悪いものとなる”と述べている。木村（1994）によれば、“アル”とは偶然性の領域に属する交換可能な形での存在のあり方であり、“イル”とは個別的で必然的な相のもとに存在することを意味する。自らが個別的・必然的な存在として実存的に“イル”というのは、一種の虚構であるのだが、統合失調症者は自己の必然性を生きること、即ち“イル”ことが困難な側面があり、「居場所」を見出すことが困難となる。また、境界例のクライアントは、あらゆる対人関係を理想化と脱価値化で彩ってしまい、その両極を激しく行き来するため、他者との安定した関係を持つことが難しい。こうしたクライアントにとっては、「居場所のなさ」とは一時の不適応状態ではなく、個人が生きてきた歴史そのものと言える。したがって、「居場所」というテーマが治療関係において浮かび上がってきたとき、そのクライアントの現在の状況のみでなく、これまで生きてきた歴史において、クライアントと「居場所」との関係はいかなるものだったのか、という点を考える必要がある¹⁰。

「居場所がない」状況を生きてきたクライアントにとっては、彼らが新たにかかわりをもつ場においてもまた、彼らが抱えてきた「居場所のなさ」が反復される可能性があるのではないだろうか。それは治療的な空間においても例外ではない。前節で、「居場所」が治療的な関係においてテーマとして浮かび上がるとき、「依存」をめぐる力動がある可能性を指摘したが、「依存」との関連において考察するならば、「居場所のなさ」を反復するクライアントは、健全な形で「依存」を達成することができなかった歴史を生きてきていると考えられる。中原（2002）は、居場所感が十全ではなかった重症局所進行乳癌患者の事例について、“成人期以降、否定的体験について他者に依存する経験が乏しく、否定的体験を語るのは Th に対してが初めてに近い体験であることが推察された”と述べている。松木（2005）は“依存を過度に自己の無力ととら

¹⁰ このことを考えるとき、実証的研究の文脈で、杉本・庄司（2006a）が、大学生の自我同一性と「居場所環境」との関係について、“現在の「居場所」の有無よりも、中学生の頃の「居場所」の有無の認知の方が、自我同一性に対してより影響を与えている”と指摘しているのは興味深い。

える、自己鍛錬や独立への強いこだわりがある場合、逆に依存しているだけですべてが治療者に解決してもらえると、「神頼み」的在り方のどちらも、治療経過での困難を予想させ」と述べている。こうした「依存」をめぐるクライアントのあり方が、セラピストとの転移関係の中で反復されるのである。クライアントの「依存」に関して、Winnicott, D.W. (1965) は次のように述べている。

過去の体験から疑い深くなっている患者は、あらゆる吟味を試みるため、依存状態に達するまでに長い道程が必要である。しかし、ひとたび依存的になると、それは幼児と母親の関係のなかでみられる幼児のような依存性を発揮する。… (略) …現実の幼児でない患者が依存的になるということは、患者にとって非常な苦痛であって、依存状態への退行の際に犯す危険は非常に大きなものである。この危険というのは、… (略) …分析医が突然患者の人格解体の恐怖、破滅恐怖、奈落の底に落ちこむ恐怖といった原初的不安の現実と強さとを認識できなくなるのではないかといったものである。

また、「居場所」となることを目指して設立される不登校・ひきこもり者の通所施設や、精神科のデイケアなどに新たに通うこととなったクライアントが、その場になじめず、ドロップアウトしてしまう背景にも、反復される「居場所のなさ」がある場合もあると考えられる。一方でまた、通所施設などの場にクライアントが依存し始め、居場所として機能してくると、クライアントの困難な部分も含む「ありのまま」が場の中に現れ出てくることになる。それは、その場にいる他のクライアントとの衝突を生むことも稀ではない。そうした事態も、一種の「居場所のなさ」の反復として捉えることができよう。そうした衝突のきっかけとなった部分こそ、治療的に抱えられ、扱われなければならない部分であると考えられる。本間 (2001) は、適応指導教室の居場所としての条件について考察する中で、“「自発的な子ども集団」の中で、子どもたちは様々な側面を表出する。… (略) …このような側面は、多くの場合、実は子ども一人一人が、今までに無意識的に遂行してきた学校や家庭での対人関係パターンなのである。それが適応指導教室という場を借りて再現されたのである。適応指導教室という「安全」で「自由」な場は子どもたちの心理的退行を促進しやすく、子ども一人一人が無意識のうちに築き上げてきた対人関係の基本的なパターンが再現されやすい”と述べている。集団の場に携わる治療者は、そうした衝突を不可避の必然として捉え、そこにこそクライアントの「ありのまま」が現れ出ていると考え、治療的に活かす姿勢が求められるのではないだろうか。

6.おわりに

本論文においては、心理臨床領域における「居場所」概念について考察を行った。まず、「居場所」概念が現在のように用いられるようになった経緯について概観した。もとは「人の居るところ」といった物理的、状況記述的な言葉だった「居場所」が、「安心して落ち着ける場所」といった心理的意味を付与され、用いられるようになったのは、不登校問題との関連が大きいことが指摘された。学校にも家にも安心して居られない不登校の子どもに対して、フリースクールといった具体的な場所を提供する形での援助が「居場所」概念の端緒であると確認された。

心理臨床領域においては、「安心して居られるところ」といった意味の他に、「ありのままの自分で居られる場所」といった意味で用いられていることが確認された。「ありのままの自分」とは、自己の肯定的な側面だけでなく、否定的・病的な側面が含まれるものであった。「ありのままの自分」で居られる「居場所」をめぐる、治療的關係でいかなる力動がはたらいているのかという点について考察し、「依存」をめぐる力動がそこにはあると考えられた。

さらに、治療關係においてクライアントの「居場所のなさ」という形で「居場所」というテーマが浮かんでくるとき、統合失調症や境界例のクライアントに例をみるように「居場所のなさ」は単なる一時的な不適応状況ではなく、クライアントがこれまで生きてきた歴史の反復であり、面接を初めとする治療關係においても「居場所のなさ」が再現される可能性を指摘した。

これらの考察を通して、「居場所」が単にあることだけでなく、その「居場所」でいかなる心の作業がなされるのが重要であると考えられた。

「居場所」は、もとは日常語であり、現在のような形で概念化されたのは歴史的・社会的な背景においてであることが確認された。そのことは「居場所」を定義しようとする際の困難の一因ともなっている。研究を行う上ではある程度の操作的定義が必要になろうが、臨床場面での活用においては、そうした定義にこだわることは柔軟さを欠くことになると思われる。居場所が日常語である以上、クライアントが語りの中で用いる可能性があり、まずはそのクライアント固有の意味を理解しようとする必要がある。臨床実践の中で、セラピストの側に「居場所」という言葉が浮かんできたときにも、同様に、まずはクライアントとの関係性の文脈で捉えねばならないだろう。北山（1993）は、臨床実践で用いる言葉について、“日常的な意味”“教科書的な意味”“患者にとっての個人的な意味”“治療者にとっての個性的な意味”“これからの臨床体験から学ぶ意味”といった 5 つの意味の領野があるとしている。そして、“その意味は面接の前は決定できない”と述べている。「居場所」という言葉についても同様のことが言えると考えられる。本研究においては、特に「居場所」の“日常的な意味”や“教科書的な意味”について考察を行ったが、本研究において見出された知見は、臨床実践において固定的に考えられるべきものではない。

今後の課題として、「居場所」概念と文化の関連を検討することが挙げられる。不登校問題との関連において、「居場所」概念が形成されてきたことを確認したが、不登校問題は日本のみならず海外においても同様に存在する。海外の不登校援助において同様の概念が存在するかどうかについて検討しなければならない。杉本・庄司（2006b）は、海外において“日本で現在使用されているような、心理的側面を含めた意味での「居場所」は、言葉の概念自体がないために、研究は行われていない”としている。この指摘を考慮すれば、不登校児童・生徒への援助の一方法として生まれてきた「居場所」は、日本文化に特有の概念である可能性がある。この問題を明らかにすることで、「居場所」概念と日本人の文化的心性との関連についての考察が可能になると考えられる。また、日本の文化に独特の概念として、土居（1971）の「甘え」の概念があるが、本研究で検討した「依存」の概念は「甘え」との類似性があると考えられる。したがって「甘え」と「居場所」の関連について考察することで、「居場所」概念と日本人の文化的心性との関係を明らかにできる可能性があると考えられる。

また、本研究では、「居場所」概念が臨床実践の中でテーマとなるときに、はたらいている

力動について考察を行ったが、そうした力動をあえて「居場所」という概念で語ることの意義については十分明らかにできたとは言い難い。すなわち、「居場所」概念に固有の視点とはいかなるものかについて、今後、考察を行っていく必要がある。

引用文献

- 安齋智子 (2003) : 「居場所」概念の変遷 発達, 24, 33-37
- Broadwin, I.T. (1932) : A contribution to the study of truancy. *American Journal of Orthopsychiatry*, 2, 253-259
- 土居健郎 (1971) : 「甘え」の構造 弘文堂
- 藤竹暁 (2000) : 居場所を考える (藤竹暁編 (2000) : 現代のエスプリ別冊 現代人の居場所 至文堂 47-57)
- 廣井いずみ (2000) : 「居場所」という視点からの非行事例理解 心理臨床学研究, 18, 2, 129-138
- 本間友巳 (2001) 事例から見た適応指導教室の分析 京都教育大学教育実践研究紀要, 1, 33-43
- 本間友巳 (2006) : 居場所とは何か——不登校・ひきこもり支援への視座 (忠井俊明・本間友巳編 (2006) : 不登校・ひきこもりと居場所 ミネルヴァ書房)
- 保坂亨 (2001) : 不登校をめぐる歴史・現状・課題 教育心理学年報, 41, 157-169
- 石本雄真 (2009) : 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3, 1, 93-100
- 伊藤美奈子 (2009) : 不登校 その心もようと支援の実際 金子書房
- Johnson, A.M., Falstein, E.L., Szurek, S.A., Svendsen, M. (1941) : School Phobia. *American Journal of Orthopsychiatry*, 11, 702-708
- 河合隼雄 (1999) : いじめと不登校 潮出版社
- 木村敏 (1994) : 「居場所について」 (磯村新・浅田彰編 (1994) : Anywhere 空間の諸問題 NTT 出版株式会社)
- 北村陽英 (1991) : 中学生の精神保健 日本評論社
- 北山修 (1993) : 自分と居場所 岩崎学術出版社
- 北山修 (2003) : 自分の居場所——精神分析理論と実践 (住田正樹・南博文編 (2003) : 子供たちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 21-38)
- 松木邦裕 (2005) : 私説 対象関係論的心理療法入門 精神分析アプローチのすすめ 金剛出版
- 文部省 (1992) : 登校拒否 (不登校) 問題について——児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して (学校不適応対策調査研究協力者会議報告) 教育委員会会報, 44, 25-29
- 村瀬嘉代子・重松正典・平田昌子・高堂なおみ・青山直英・小林敦子・伊藤直文 (2000) : 居場所を見失った思春期・青年期の人びとへの統合的アプローチ 通所型中間施設のもつ治療・成長促進的要因 心理臨床学研究, 18, 3, 221-232
- 妙木浩之 (2003) : 「心の居場所」の見つけ方 面接室で精神療法家がおこなうこと 講談社
- 妙木浩之 (2010) : 初回面接入門 心理力動フォーミュレーション 岩崎学術出版社
- 中原睦美 (2002) : 受診が著しく遅延した重症局所進行乳癌患者の心理社会的背景の検討 依

- 存のあり方と居場所感をめぐって 心理臨床学研究, 20, 1, 52-63
- 中島喜代子・廣出円・小長井明美 (2007): 「居場所」概念の検討 三重大学許幾学部研究紀要, 58, 77-97
- 西村喜文 (2000): 重症心身障害者へのコラージュ療法の試み コラージュ療法の意義について 心理臨床学研究, 18, 5, 476-486
- 岡田光夫 (1998): 居場所がないと訴える中年男性との精神療法——幻の At Home を求めて 精神分析研究, 42, 5, 602-607
- 奥地圭子 (1991): 東京シュレー物語 教育史料出版会
- 杉本希映・庄司一子 (2006a): 大学生の「居場所環境」と自我同一性との関連——現在と過去の「居場所環境」に対する認知との比較を中心として 筑波教育学研究, 4, 83-101
- 杉本希映・庄司一子 (2006b): 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化 教育心理学研究, 54, 3, 289-299
- 杉本希映・庄司一子 (2007): 子どもの「居場所」研究の動向と課題 カウンセリング研究, 40, 1, 81-91
- 住田正樹 (2003): 子どもたちの「居場所」と対人的世界 (住田正樹・南博文編 (2003): 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 3-17)
- 鈴木信子 (2005): 夢を語り続ける女性との面接 心理臨床学研究, 23, 2, 233-243
- 田村絹代 (1996): 居場所を求めて転々とした後、母親と同一の所属を選択した同一性拡散の症例——その病理と治療関係について 精神分析研究, 40, 3, 228-233
- 徳田仁子 (2004): スクールカウンセリングを通して生活環境を整える——不登校生徒の「居場所」さがし 臨床心理学, 4, 2, 213-217
- Treynor, J.V. (1929): Schoolsickness. Journal of Iowa State Medical Society, 19, 451-453
- 矢幡久美子 (2003): コラージュの中の文字表現 居場所探しのテーマ 心理臨床学研究, 21, 5, 450-461
- 山田均 (2011): 特集にあたって 臨床心理学, 11, 3, 319-323
- 山中康裕 (2001): たましいの窓 山中康裕著作集 1 岩崎学術出版社
- Winnicott, D.W. (1965): *The Maturation Processes and the Facilitating Environment* The Hogarth Press Ltd., London 牛島定信 (訳) (1977): 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社

(心理臨床学講座 博士後期課程 4 回生)

(受稿 2012 年 9 月 3 日、改稿 2012 年 10 月 31 日、受理 2012 年 12 月 27 日)

謝辞

本論文を執筆するにあたりご指導いただきました、京都大学大学院教育学研究科桑原知子教授に感謝申し上げます。

The Concept of “*Ibasho*” in Clinical Psychology

NAKAFUJI Shinya

The present study aimed to consider the concept of “*Ibasho*” in clinical psychology. First, it was examined how the term “*Ibasho*” acquired the psychological meaning, i.e., a place of safety. Originally, “*Ibasho*” had only descriptive meanings, such as the place a man exists. From the 1980s, for children not attending school, places where they can stay in safety were provided, and such places began to be called “*Ibasho*.” Thus, the term “*Ibasho*” acquired its current meanings. In clinical psychology, it was emphasized that “*Ibasho*” was a place where one can be as he is. It was considered that in a therapeutic relationship between a client and a therapist, there was a problem of dependence when “*Ibasho*” became an issue between them. A client’s dependence on a therapist may let him express the pathological part of self. Moreover, the possibility was mentioned that a client who did not have “*Ibasho*” throughout history repeatedly experienced that he could not get “*Ibasho*” in the relationship with his therapist. Future research topics are also discussed.